

報告3. 藤田佳久（愛知大学名誉教授）

報告テーマ：書院生の見た近代東アジア：「東亜同文書院大旅行」と『支那省別全誌』の間

要旨

本報告は、東亜同文書院の学生たちが実施していた調査旅行、いわゆる大旅行を通して、近代東アジアの実像を明らかにしようとする一環である。

東亜同文書院の大旅行は、当時内地の教育機関が行っていた日本勢力下にある朝鮮半島や中国東方地方への数日間の修学旅行とは異なり、学生が自力で数カ月をかけて行う東アジア全域でのフィールドワークであった。その調査結果は、卒業論文に相当する『調査旅行報告書』としてまとめられ、さらに中国に関するエンサイクロペディアである『支那経済全書』全12輯（東亜同文会1908-1909）、『支那省別全誌』全18巻（同前1917-1920）、『新修支那省別全誌』第1-9巻（同前1941-1946）編纂の基礎データとして用いられた。

清末民初から軍閥混戦を経て日中戦争に至る時期の近代化と混乱がない交ぜとなっていた中国の実像を見つめ続けた東亜同文書院大旅行の記録は、日本においてはもちろん、中国においても貴重なものである。しかし、戦後、東亜同文書院が日本の中国侵略を補翼したものとみなされるようになると、大旅行もスパイ活動の類いと捉えられるようになり、長らく等閑視された。この状況は、イデオロギーの対立であった東西冷戦の終焉によって大きく変化し始める。

報告者は、大旅行の一部のルートを現地で追跡検証することによって、その地誌学的調査の正確性を明らかにするとともに、調査活動の成立過程や中国側の協力も得つつ比較的自由に調査が実施されていた時期から日中戦争による厳しい状況下での活動を強いられた時期に至るまでの大旅行の全体像を、『東亜同文書院中国大調査旅行の研究』（大明堂2000）や『東亜同文書院大調査旅行記録』全5巻（大明堂、不二出版1994-2011）などにまとめてきた。こうした大旅行に対する再考察は、日本だけではなく中国においても展開しており、中国側でもそれらの原著が相次いで復刊されるようになり、書院生の作品を今や無視できない状況になりつつある。

以上の状況をふまえ、本報告は、まず基本的な手続きとして、具体的には書院生の調査報告がどのような形で『支那省別全誌』へ展開したかについて検討し、両者の相互関係を明らかにすることにより、書院生による「大調査旅行」の性格づけを検討する。